

## 宣教の神学から考える神学教育—序論的考察—

篠原基章

### 序 論

一般的に神学教育は4つの専門領域(四重構造)からなると理解されている。すなわち、聖書学、組織神学、教会史、そして実践神学である。この区分はドイツの神学者シュライエルマッハーの影響によるもので、当時の世俗的な諸科学の区分にならったものである。それ以降、この区分は西洋諸国のみならず、日本を含むその他の地域の神学教育におけるカリキュラムの普遍的な基本構造となっている<sup>1</sup>。

しかしながら、*Theologia: The Fragmentation and Unity of Theological Education* (1983年)において、エドワード・ファーレイ(Edward Farley)は、近代以前において神学は内容的な区分はありつつも単一の領域とされてきたことを指摘している。ファーレイによれば、何世紀にも渡り、神学は第一に神へと向かう「人間の魂のハビトゥス(*habitus*)」—本来的習性—の探究であった。そして、第二に神学は知的探求としての学問領域を指して用いられてきた。しかし、古代、中世、そして宗教改革においてもこれら二つを明確に切り離す考え方はなく、両者とも神と神に関わる事柄についての本来的習性の探究に集約されるものであった<sup>2</sup>。

ところが啓蒙主義の影響によって、神学は理論的な神学と実践的な神学に分割され、前述した4つの専門領域に分けられるようになる。これは、神学の専門化を意味しており、それ以降の神学者たちはそれぞれの専門領域に分かれ、

<sup>1</sup> Edward Farley, *Theologia: The Fragmentation and Unity of Theological Education* (Philadelphia: Fortress Press, 1983), 101-101.

<sup>2</sup> Ibid., 31.

専門化されたそれぞれの神学領域のうちに籠るようになっていく。現代を代表する神学者の一人であるアリスター・E・マクグラスは「神学研究は、ばらばらの情報の塊に精通すること以上のもの」ではなくなってしまったと指摘している<sup>3</sup>。

マクグラスは『宗教教育を語る — イギリスの神学校はいま』において、このような神学教育から脱却する必要性を訴えている<sup>4</sup>。マクグラスの指摘は多岐に及ぶが、信仰と学問を統合する形での神学教育に立ち返ることを促している。また、神学が単に学問に仕えるのではなく、直接的に現代に生きる神の民である信仰共同体に仕える学問となるべきこと、そして、献身と霊性の問題を神学教育の根幹として据えるべきことを指摘している。世俗化は神学と神学教育における信仰と学問、また神学と教会との間を引き裂く方向へといざなったが、マクグラスはそれらの関係性の回復を促している。

この小論の目的は、マクグラスの議論に刺激されつつ、宣教の神学の観点から神学教育の宣教的特質とその使命について問い直すことにある。宣教が教会と神学にとって本質的な事柄であるならば、宣教の神学の観点から神学教育を問い直すことは非常に重要なことであろう。一般的に、神学教育は教会に仕える教職者のための教育として認識されている。しかし、このような聖職者中心のパラダイムは歴史の中で形作られたものであり、唯一のパラダイムではない。元々の神学の意味と教会の使命に目を向けるとき、神学教育は「教職的パラダイム」だけにおさまりきらないように思われる。この小論は、神学教育のビジョンに関する宣教的な観点（「宣教的パラダイム」）からの序論的考察である。

## 宣教学と神学教育

神学教育において、宣教学は一般的に実践神学の一部として位置づけられてきた。しかしながら、宣教学を既存の「四重構造」（聖書学、組織神学、歴史学、実践神学）においてどのように位置づけるかについては様々な議論がある。い

くつかのモデルが提起されてきたが、宣教学を既存の「四重構造」から独立した新たな神学領域として位置づけるモデルが最も市民権を得ているように思われる。このアプローチは、ハレ大学で教鞭をとったグスタフ・ヴァルネク (Gustav Warneck) が提唱したものである。ヴァルネクは宣教学が神学の「お客様」ではなく、「居住権を有する独自の学問領域」として確立することを願ったのであった<sup>5</sup>。今日でも多くの西欧の神学教育機関は、独立した宣教学 (missiology) 専攻または Intercultural Studies を擁している。American Society of Missiology や Evangelical Missiological Society などの宣教学独自の学会が設立されており、宣教学関連の専門書を出版する出版社も存在する。興味深いことは、宣教学者たちは神学の「四重構造」をモデルとして、宣教学の領域における独自の「四重構造」を発展させてきたということである。すなわち、宣教の聖書的基礎の研究（聖書学）、宣教の神学的理論の研究（組織神学）、宣教の歴史研究（キリスト教史）、そして宣教の実践に関する研究（実践神学）である。

宣教学を神学における独自の学問領域として位置づけるモデルは一定の成功を収めたといえよう。しかし、このモデルの負の遺産は、既存の「四重構造」から自らを引き離してしまったことである。その結果、現代において宣教学はなおも宣教師のための学という理解が広く一般的であるように思われる。

日本の多くの神学校において宣教学は実践神学の領域の一部として位置づけられているが、もし宣教学が海外布教活動に関する規範的且つ実践的研究であるとするならば、それは宣教師のためだけに必要な学問という位置づけになるであろう。別言すれば、宣教学は宣教師としてではなく母国で牧師となる学生たちにとっては不必要な学問領域とみなされることとなる。「宣教学とは何か」という問いは、非常に興味深い問いである。しかしながら、ここで問われるべきは、「宣教学 (missiology) とは何か」ではなく、「宣教 (mission) とは何か」という問いである<sup>6</sup>。

<sup>3</sup> アリスター・E・マクグラス『宗教教育を語る — イギリスの神学校はいま』高橋義文訳（キリスト新聞社、2010年）70頁

<sup>4</sup> この書物はマクグラスが2008年に聖学院大学総合研究所の招きによって来日した際に行われた講演を出版したものである。

<sup>5</sup> デイヴィッド・ボッシュ『宣教のパラダイム転換 下巻—啓蒙主義から21世紀に向けて』（東京ミッション研究所選書シリーズ4）東京ミッション研究所訳（新教出版社、2002年）398頁

<sup>6</sup> 前掲書、401頁

## 宣教と教会

19世紀が世界宣教の時代であったとするならば、20世紀は宣教概念の深化の時代であった。20世紀の宣教思想史の展開を詳細に論じることができないが、その中で最も重要な理解の一つは「教会はその本質において宣教的である」<sup>7</sup>という神学的理解である。

教会と宣教の関係に関する議論は、1952年のウィリンゲン宣教会議において大きく前進した。この宣教会議において、宣教と教会の関係性は「ミッシオ・デイ」（神の宣教）という神学的概念の中で捉え直された。ウィリンゲン会議で可決された『教会の宣教的召しに関する宣言』（*A Statement on the Missionary Calling of the Church*）において、「ミッシオ・デイ（神の宣教）」という用語自体は用いられていないが、その概念は宣教と教会理解の新たなパラダイムとして大きな役割を果たした<sup>8</sup>。

この神学概念の形成に先駆的に寄与した神学者はカール・バルトであった<sup>9</sup>。バルトは1932年のブランデンブルク宣教会議での発題において、教会の宣教の使命を三位一体の神ご自身の活動において論じた。すなわち、根源的な意味において、宣教は教会にではなく神ご自身の性質と活動に属するものであり、教会はこの世における「神の宣教」（ミッシオ・デイ）の業に参与する器として位置づけられた。教会は神の宣教の業に参与するためにこの世界に派遣された宣教の民であるという理解である。

後に、このミッシオ・デイの概念は1965年にGeorge Vicedomの著作である*The Mission of God: An Introduction to a Theology of Mission*（1965年）によって広く一般的に用いられるようになる。その後、「ミッシオ・デイの神学」は社会運動の激動の時代にあって変質することになるが、この神学が提示した基本的

な主張は決して古びることはない。この神学的パラダイムは今やカトリック・正教会・エキュメニカル派・福音派陣営を問わず、共通の神学的な理解となっている。

ここで重要なのは、宣教と教会の両者は不可分なものとして、緊密な関係性において捉え直されているということである。この理解を土台として、「教会は本質において宣教的である」という理解へと深められていく。教会の本質が宣教であるとき、もはや宣教は教会が為す複数の務めの一つではなく、教会の存在そのものを表す用語である。そうであるとすれば、神学教育もまた宣教を本質として捉え直す必要があるだろう。

このような理解は旧約神学者クリストファー・J・H・ライト（Christopher J. H. Wright）において展開されている。ライトは2010年に開催された第三回ローザンヌ世界宣教会議において決議された『ケープタウン決意表明』（*The Cape Town Commitment*）の中心的起草者でもある。ライトは13年という長い構想期間を経て完成させた大著『神の宣教—聖書の壮大な物語を読み解く』を著し、聖書は一貫した壮大な神の宣教の物語（ナラティブ）であることを詳細に論じている<sup>10</sup>。このような解釈学的アプローチは「宣教的解釈学」（*missional hermeneutics*）と呼ばれている<sup>11</sup>。

ライトは宣教を聖書が取り扱う様々なテーマの一つとしてではなく、聖書全体の中心的概念として位置づける。この宣教的な聖書理解はライトが起草した『ケープタウン決意表明』においても展開されている。ライトはオール・ネイションズ・クリスチャン・カレッジの聖書課程の教授であった時、「宣教の聖書の根拠」という授業を担当していた。しかし、ライトはその授業を講じるなかで、宣教は聖書が取り扱っている様々な事柄の一つではなく、聖書そのものが語る中心であることに思い至り、「聖書の宣教的根拠」という講義タイトルに変更したいと考えるようになったと記している<sup>12</sup>。宣教が教会と聖書において中心

<sup>10</sup> クリストファー・J・H・ライト『神の宣教—聖書の壮大な物語を読み解く』1-3巻（東京ミッション研究所選書シリーズ14, 16, 17）東京ミッション研究所（東京ミッション研究所、2012-2016年）

<sup>11</sup> Greg McKinzie, “Missional Hermeneutics as Theological Interpretation,” *Journal of Theological Interpretation* 11 (2017): 157-179 を参照。

<sup>12</sup> ジョン・ストット、クリストファー・J・H・ライト共著『今日におけるキリスト

<sup>7</sup> この古典的表現は第二バチカン公会議における『教会の宣教活動に関する教令』（*Ad Gentes Divinitus*）に見出すことができる。第二バチカン公会議において、教会と宣教は一貫性と明示性を持って示されている。

<sup>8</sup> International Missionary Council, “A Statement on the Missionary Calling of the Church,” *International Review of Mission* 92 (2003 [1952]): 606-609.

<sup>9</sup> ヨハネス・オーゴート（Johannes Aagaard）は、バルトを「この時代において決定的重要性をもったプロテスタント宣教学者」と評している。Johannes Aagaard, “The Main Trend in Modern Protestant Missiology,” *Studia Theologica* 19 (1965): 238.

的な事柄であるならば、神学教育において宣教をどのように取り扱うべきか真正面から考える必要があるだろう。このことは具体的な神学校のカリキュラムの在り方に対して重要な一石を投じることになる。神学教育における宣教的性質は、伝統的な神学の「四重構造」を乗り越え、神学教育全体を再編成するための新機軸となりうるだけの潜在性を持っているからだ。神学の一分野に宣教があるのではなく、宣教の神と神の民の宣教の使命のゆえに神学という学問があるという位置づけこそ聖書的な理解ではないだろうか。

これは決して宣教学が神学教育をハイジャックするという意味ではない。ここで問われているのは「宣教学」ではなく、「宣教」そのものである。『ケープタウン決意表明』は、教会の使命と神学教育の使命の密接な関係性について次のように表現している。

地上における教会の使命（ミッション）は、神の使命（ミッション）に仕えることであり、神学教育の使命（ミッション）は教会の宣教（ミッション）を力づけ、教会の宣教（ミッション）と共に歩むことである<sup>13</sup>。

神学教育における「四重構造」の分類は、分割することによって様々な専門的視点からの学びを積むことができるというメリットがある。長年にわたって用いられてきたのは、その分類が有用であったからこそであろう。しかし、細分化が進むことで、分断された情報の塊を提供することになってしまう。そこには横断的な視点が必要である。横断的な視点はもちろん一つだけに限定する必要はないが、宣教の使命は主要な横断的な視点として位置づけることができるだろう。

宣教が教会の試金石であるとするならば、神学教育の試金石もまた宣教的であるかどうかということであろう。神学教育はその召命と独自性の感覚を自覚的に持ち続ける必要がある。宣教しなくなった教会が教会でなくなるように、宣教を周縁化させた神学教育もまた真の神学教育とはいえないからである。

者の宣教』立木信恵訳（いのちのことば社、2016年）58頁

<sup>13</sup>『ケープタウン決意表明』日本ローザンヌ委員会訳（いのちのことば社、2011年）90頁

## 教会の使命と神学教育の使命

神学教育の使命が教会の使命（ミッション）の伴走者となることであるなら、神学教育は教会の使命と同等の射程を持つ必要があるであろう。既に広く知られているように、1974年の『ローザンヌ誓約』は福音派の宣教観の転換を促した歴史的な文書である。事実、それ以降の福音派の宣教の理論と実践は『ローザンヌ誓約』を土台として展開されてきたといえる。『ローザンヌ誓約』は「宣教＝伝道」の図式から「宣教＝伝道＋社会的責任」という包括的（ホーリスティック）な宣教理解への転換を促した。ローザンヌ運動の中心的な指導者の一人であり、『ローザンヌ誓約』の起草者であるジョン・ストットは、宣教を「神がその民を世に遣わしてなさしめようとする全てを含む包括的な用語」と定義した<sup>14</sup>。そうであるなら、神学教育もまた「神がその民を世に遣わしてなさしめようとする全て」を射程に置かなければならないだろう。

第二回ローザンヌ世界宣教大会（1989年）の宣言文である『マニラ宣言』において、地域教会の使命は次のように表現されている。「すべての地域教会は、それぞれがおかれている地域社会に対して、福音宣教と愛の奉仕のわざを果たす責任を持っていることを確認する」<sup>15</sup>。教会の使命がこの世において包括的な神の国の福音を存在と言葉と奉仕を通して包括的に証することであるならば、神学教育もまた包括的な教会の召しに仕える働き人の養成を使命とする必要があるだろう。

しかしながら、一般的な傾向として、伝統的な神学教育の焦点は「教会」にあり、教会内の働きのための教育に限定されてきたように思われる。神学教育の使命が教会の包括的な宣教の使命を力づけ、それに伴走するものであろうとするなら、教会の包括的な使命についての神学的・実践的な学びをカリキュラムに加えていく必要があるだろう。

図式化するならば、神学教育は「二つのW」を自らの両輪として位置づけることが重要であろう。二つのWとはWord（聖書）とWorld（世界）である。

<sup>14</sup> John R. W. Stott, *Christian Mission in the Modern World* (Downers Grove: InterVarsity, 1975), 35.

<sup>15</sup> 日本ローザンヌ委員会『マニラ宣言』<https://www.lausanne-japan.org/> (2019年10月17日アクセス)